

館 林

秦野市支部 森田 和夫(子)

戦没者 森田 隆治

戦没地 シベリヤ

群馬県館林は、私達家族が疎開した町であり、鶴舞う形の群馬県と喩えられた鶴の頭に位置する城下町である。疎開前は東京南千住に居住し、父は川向ここの向島で鉄工所を営み工作機械を製造していた。機械が完成した時の記念写真を見ると父共々癖の有りそうな職工さん達の誇らしげな顔を見る事が出来る。疎開後一度南千住を訪れたが、住んでいた家は壊され辺りは廃墟のようだった。後の東京大空襲で下町一帯が焼け野原と化したのを思えば命拾いをしたのかもしれない。父は、この館林から出征し大陸に渡って行った。

館林駅での出征兵士の見送りは記憶にある。父はその際母にそれなりの額のお金を用意して行ったようだが、その父は昭和二十一年シベリヤ抑留中に死亡した。ロシアが行った行為は許せるものではない。

私は昭和二十年四月館林小学校に入学した。直接的な戦争の記憶は、中島飛行機の工場を爆撃に向かうB29の爆音を防空壕の中から震えながら聞いていた空が赤く染まっている。

そして八月十五日、生活が一変した。それまでは出征兵士の家でもあり、疎開も父の会社が強制合併を受けてのことで、近所にはそれなりの力をみせていたことだろう。だが父の生死不明なことから今まで住んでいた家は明け渡しを要求され、近くの家の二階といつても屋根裏部屋に等しい一間に移りこの部屋から親子三人の生活が始まった。戦後のインフレで、父の蓄えなど紙切れ同然となり、母が何度か町の古着屋を訪ねていたのを記憶している。おそらく足元を見られて買い叩かれていたことだろう。

母の着物が姿を消してからは、衣類寝具がボロと化するのにさしたる時間は要していない。小学三〜四年の頃か、朝食のお椀の中を見るとさつま芋の汁に団子二〜三個浮かんでいるだけのもので、学校の授業は四時間目が体操で、校庭にはコークスの燃え殻が敷き詰めてあり、とても素足で歩けるものではない、級友達は其々に履物を身に着けていた。空腹と足の裏の痛さで校庭の隅でしゃがんでいると教師の叱声が飛んでくる「森田！何をしている」胸の内で教師を罵ったところどころにかなるわけでもなし、ただその日の朝の母の悲しそうな顔がうかんでくるだけである。この頃と思う、夕方母が共同井戸の傍らでうずくまり肩を震わせていたのを見たのは、後年母はお前たち連れて死のうかと思つた事があつたと打ち明けている。一体母はこの時期をどんな思いで乗り切つたのだろう。

その後、母子寮が建設され入寮し生活保護を受けるようになった。母は時折「生活保護なんていやだね」と口にしていた。要らぬ中傷を気にしてのことだったろう。

妹が義務教育を終了すると退寮し館林を去ることになった。その後は転居を繰り返すことにな

るが、母は新たな転居先で落ち着くと「来たよ」と云う、何のことかと聞くと父だという。どうやら父の霊か何か、父を感じ取っての事のようにだ。

母は転居の度に父の墓に住所を書いた紙切れを埋めてきたが、秦野に来るには時を要したようだ。何年か経ってやっと母の「来たよ」を聞くことができた。

その母も父のもとに逝って二十四年経つ、享年七十三歳、冥福を祈る。